

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者	【人間発達科学専攻 2013年度生】	要 旨
論文題目	消費組合刊行資料にみる「家庭」と「経済」の関係 —1920年代から1940年代を中心に—	<p>本論文は、1920年代から1940年代の消費組合運動において「家庭」と「経済」の関係についてどのような言説が形成されたのか検討するものである。分析対象は、産業組合の『家の光』、神戸消費組合の『新家庭』、全国農民組合の『婦人戦旗』『働く婦人』『少年戦旗』『ピオニーロ』である。分析にあたっては、資料において、「女性」と「子ども」がいかにして消費組合に関わるべきとされていたのかという点に着目した。</p>
審査委員	(主 査) 教 授 小玉亮子	<p>分析の結果、「女性」に関する記事では、第一に、『家の光』と『新家庭』では女性の経済的独立に関する議論が展開され、国家や社会に対して貢献することが期待されていた。第二に、『家の光』や『新家庭』では女性の経済的独立が議論される一方で、その経済的独立とは「家庭」とどまる範囲のものでなければならなかった。第三に、『家の光』に関して農村版と都市版の比較分析をおこなったところ、両者は共に、都市批判をつうじて堅実な農村家庭の女性を理想としていた。第四に、『婦人戦旗』と『働く婦人』では、「家庭」は「搾取の場」として捉えられていた。資本主義を打倒するという目的で「経済」が語られ、女性は階級闘争の要員として考えられていた。</p> <p>「子ども」に関する記事では、第一に、『家の光』では「組合員としての子ども」に向けて平易な喩え話が用いられながら、産業組合精神が伝えられていた。第二に、『家の光』とは対照的に『少年戦旗』と『ピオニーロ』では、子ども同士の対立を厭わない記事が掲載され、闘争要員としての子どもが強調されていた。第三に、『ピオニーロ』では、帝国主義および資本主義経済に対する批判的な態度を養成するために、思想を教育することが主な目的とされていた。</p> <p>本研究では、「女性」だけでなく「子ども」を対象に加えて「家庭」と「経済」との関係について検討したという点で独自性を持つものとなった。分析の結果、女性と子どもについても国民の「協調」と階級の「闘争」が反映されており、消費組合運動の中でも対照的な言説が形成されていたということが明らかになった。</p>
	(副 査) 教 授 柴坂寿子	
	(副 査) 教 授 浜口順子	
	(審査委員) 准教授 斎藤悦子	
	(審査委員) 教 授 千田有紀 (武蔵大学)	